

# View from Down Under

スプリングレーシングカーニバルの話題から

ハイランド真理子

## スプリングレーシングカーニバル

今年もメルボルンカップ・レーシングカーニバルが、10月30日のダービーから始まった。当然ながらいつも、エキサイティングなカーニバルなのだが、今年は一層エキサイティングなカーニバルとなった。理由は、メルボルンカップが150回目という記念すべきカップで、さらにカップカーニバルの前のコックスプレートと2年連続で優勝したソーユーシンクが、マッキノンステークスに出走、その3日後のメルボルンカップにも出走することが決まったからだ。

### ソーユーシンク

「So You Think」\*そうか、君はそのように考えるのか、という名前の面白さ。セイントリーから始まる「あの」黄色と碧盤の目の勝負服。パート・カミングス調教師とオーナーのダトー・タン・ナム氏というコンビ。ソーユーシンクには、人気を集めるあらゆる要因がそろっていた。彼がオーストラリアの最強馬を決めるコックスプレートで、3歳、4歳と2年連続で優勝したとき、ファンを魅了したのは国民的なレース「メルボルンカップ」での優勝だった。Can he? 勝てるだろうか。つまり、彼がメルボルンカップのあの2マイルを走れるかと問いかける。そして、そこには走って欲しいというオーストラリア国民の大きな願いがあった。メルボルンカップに勝てば、ソーユーシンクはオーストラリア人にとって「永遠の競走馬」であるフ

アーラップに迫り、彼を超えることができる。ファーラップは、2回のコックスプレートと、メルボルンカップを勝っている。さらに、1年の間に、コックスプレート、マッキノンステークス、そしてメルボルンカップを勝っている。しかし、ソーユーシンクが勝てば、1880年と1883年にわずか2頭だけが果たしたスプリングレーシングカーニバル無敗という記録を持つ3頭目の馬になる。そして、2マイルという距離を経験せずに初めてメルボルンカップを勝つ「最初の」オーストラリアベースの馬になる。いや、なつたはずだった。

### マッキノンステークス

今書いたように、マッキノンステークスで大雨の中、58\*もの重いハンデを背負って4馬身近くちぎって勝ったソーユーシンクを、オーストラリア国民は、ファーラップの再来だと期待していた。同レースには、今年のコーフィールドカップ優勝馬デスカラードも、昨年のメルボルンカップ優勝馬ジョッキングもいたが、ソーユーシンクは「簡単に」勝った。高まる期待の大きな渦の中で、今年のメルボルンカップは開催された。私は、コーフィールドカップには行くことが出来たものの、メルボルンカップカーニバルには、体調を崩して行くことができず、主人と老夫婦二人（と、愛犬サリーと）、シドニーの自宅で観ることになった。

## メルボルンカップ

### メルボルンカップ優勝はフランス遠征馬

メルボルンカップの優勝馬が、以前本

誌でも紹介した（自慢）フランスからの遠征馬、アメリカンだったことは、おそらく読者は既にご存じのことだと思う。「The Frenchが150年目のメルボルンカップを奪い取った」などと書いた記事もあったが、翌日の新聞の見出しには、ゴール前の観衆に向かってキスを投げたジェラルド・モッセ騎手にちなんで「French Kiss」、写真はカップにキスをするモッセ騎手の姿があった。他にも「アメリカン・エクスプレス」「アメリカン・ビューティー」などと、メルボルンカップ翌日の新聞は大きく書き立てた。ソーユーシンクが勝たなかったのは残念だったが、スポーツマンシップ旺盛なオーストラリア人は、国際競技でも必ず相手方への大きな拍手を惜しまない。自分たちが負けても必ず、相手方に大きな拍手をする。いつもの英語のレッスンで申し訳ないが、Good sportという言葉は、「勝ち負けにこだわらない人」の意味を持つ。Australians are generally good sports、「オーストラリア人は勝ち負けにこだわらない人たちだ」という感じで使う。表彰式で、アメリカンのオーナーの一人ジェリー・ライアン氏はこう語った。「今日はメルボルンカップが本当に国際的になった日だ。フランス人に生産されたアメリカ産の馬が、フランスに渡りフランスで調教されて、香港で乗っているフランス人騎手が乗り、我々オーストラリア人オーナーに勝利をもたらした」と。そして彼の言葉は、まさに、新しい時代のオーストラリアの競馬を象徴しているようであった。



コックスプレートを手にするのは、優勝馬ソーユーシンクを管理する、B.カミングス調教師



伝説の名馬ファーラップを超えるも期待された、ソーユーシンク。メルボルンCの3日前に行われたマッキノンSを快勝



メルボルンCで見事優勝したのは、フランスからの遠征馬アメリカン。人気のソーユーシンク(左)などライバルを抑えた。鞍上は好騎乗を見せたG.モッセ騎手

メルボルンCの表彰式。左からアメリカンのオーナー、ケヴィン・ブランフォード夫妻とジェリー・ライアン夫妻。G.モッセ騎手、A.ド＝デュブレ調教師



### 好騎乗のG.モッセ騎手

それにしても、モッセ騎手の戦略は見事だった。彼は、フレミントンのコースを歩き(岩田康誠騎手もそうしたのだというが)、さらに、出走馬の全てのフォームをチェックしていたという。彼が今、仕事場にしている香港には、オーストラリア人騎手も大勢いるから、レースについての情報も入手したのだと思う。カップ後のテレビ番組で「何年も何回もオーストラリアにやってきて騎乗しているのに、いつも自分たちの騎乗のスタイルを変えない騎手たちがいる。彼らは本国では一流かも知れないが、オーストラリアのレースで勝つには、オーストラリアに合ったやり方があるはず。モッセ騎手は見事にオーストラリア流の乗り方をして勝った」と、出演者が語っていた。モッセ騎手は、本命ソーユーシンクにピッタリとついて、同馬がスピードを増した瞬間に追いかけて抜いた。3枠という絶好の内枠をひいたトウカイトリックの藤田伸二騎手は、1頭だけ内枠を走り続け先頭に立ったが、後ろから追いかけてきたソーユーシンク、アメリカン、マラッキーデイに捕まり、他の多くの馬たちに追い越され、結局12着に終わってしまう。レース後の藤田騎手のコメントは、「馬場が合わなかった」というものであった。騎手の乗り方について、日本の競馬ジャーナリズムは批判をしたりすることはないらしいけれど、オーストラリアや他の国々では多いにある。今回のメルボルンカップでの敗因についても、パート・カミングス調教師が、仕掛けが早かったと、ソーユーシンクに騎乗したスティーブン・アーノルド騎手の乗り方を批判している。

### 優勝馬アメリカンを巡る話題

今年のメルボルンカップには、およそ11万人の観衆がフレミントンに詰め掛けた。オーストラリアは初めてのアラン・ド・ロワイユ＝デュブレ調教師は、2度

凱旋門賞を勝っているが、レース後のインタビューで「アトモスフィア(競馬場の雰囲気)は、おそらく世界で一番いいのではないだろうか。この分だと、来年またフランスから多くの馬がやって来そうだ」と答えたという。今回の優勝でアメリカンは、レーティング120となり、アイルランドのセントレジャーを勝ったサンフロンティアズの119やアスコット・ゴールドカップを勝ったライトオブパッセージの118を抜いて、世界最強のステイヤーになったと、レーシングビクトリアのハンディキャッパーの一人は語っている。なお、レーシングビクトリアは、アメリカ産馬が勝ったことで「検疫の問題があるが、来年はアメリカの馬が遠征してくるよう動いてみたい」と言っている。

そうそう、面白い話をひとつ。アメリカンがゴールに入った後、ジョッキールーム近くのテレビでカップを観戦していたパート・カミングス調教師は、「あれはどこの馬だ」と付近にいる人に聞いたという。聞かれた人が「フランスの馬だけれど、オーナーはオーストラリア人だ」と答えると、「そうか。だったらいいや。オージーだからね」と返したという。うーん、カミングス師らしい。さて、アメリカンは2月にオーストラリアのオーナーたちに22万5000ドル(約2000万円)で買われた。そして、メルボルンカップ1着で賞金360万ドルを手にした。

アメリカンは、フランスに戻る前に、12月12日に香港ヴァーズに出走の予定だ。「ジャパンカップは？」とオーナーのライアン氏にメールしたら、「そうか、それもあったね。調教師に伝えておく」と返信。もう遅いのは分かっていたのだけれど……。世界最強のステイヤーと日本の馬との勝負。実現すれば話題性はかなり高いと思うがどうだろうか。そうだと来年だったら可能性があるかも、と思った

ところ、デュブレ調教師は、来年は凱旋門賞で走らせるのだという。そうか、そうするとナカヤマフェスタと一騎打ちか。もしかしてジャパンカップよりずっと面白いかも知れない。

### ソーユーシンク売却の衝撃ニュース

そしてカップ後、衝撃的なニュースが流れた。それは、メルボルンカップでは3着になったものの、オーストラリアの国民的な競走馬であるソーユーシンクが、もうオーストラリアではレースをしないというニュース。ソーユーシンクがクールモアに買われて、ヨーロッパに行き、エイダン・オブライエン調教師の管理の下で競走するのだという。さらに、ソーユーシンクの売買については、管理をしていたパート・カミングス調教師が知らなかったということも報道され、オーストラリア国民の意見は真っ二つに分かれた。「カミングス調教師は調教しただけ。決定はオーナーがする。しかも、世界にオーストラリアの馬が飛び出すのだから、オーストラリアにとっては得」という人たちと、「1歳のソーユーシンクは、まだまだオーストラリアで勝つべきレースがある。それをなぜ？」と、82歳、病気に悩むカミングス調教師の心根とともに悲しんでいる人たち。私は、世の中の変化を受け入れるイケてる年寄り(笑)だから、前述の方に賛成。「パート、もっと長生きして、またチャンプを調教してよ」という感じ。ただ、今回のことで、長い間の友情で結ばれていたというカミングス調教師とダトー・タン・チン・ナム氏の関係は壊れてしまったかも知れないから、それが残念。カミングス調教師は「ダトーはもうお金は必要ないはずなのに」とつぶやいたという。それから、ソーユーシンクの売買は、クールモアが半分持っていて、その価格が3000万ドル